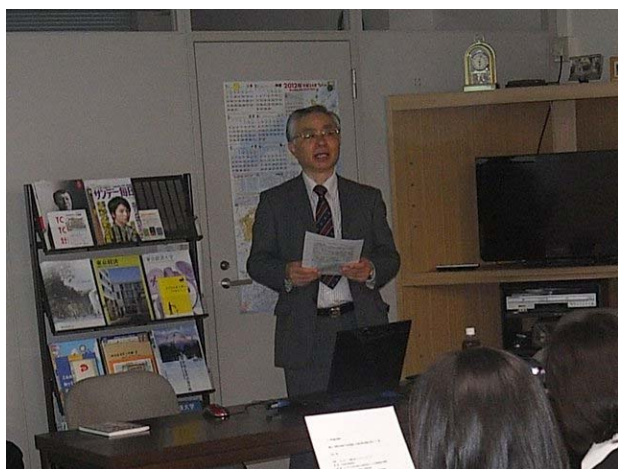


◆KM 学会「第 19 回知の創造研究部会：事例研究発表会」の様子—写真集

作成： 松本 優

(5月11日) 於：大手町ビル 533 号室 (東京経済大学葵友会オフィス)



(植木(部会長より学会理事会の報告と今日の進め方の説明)



発表 1、知の創造と経営革新：LSI の評価・解析 (株エリア) 安倍 博文氏(写真左)

発表 2、日本リファイン(NR)の知の創造 八代 英美氏(写真右)

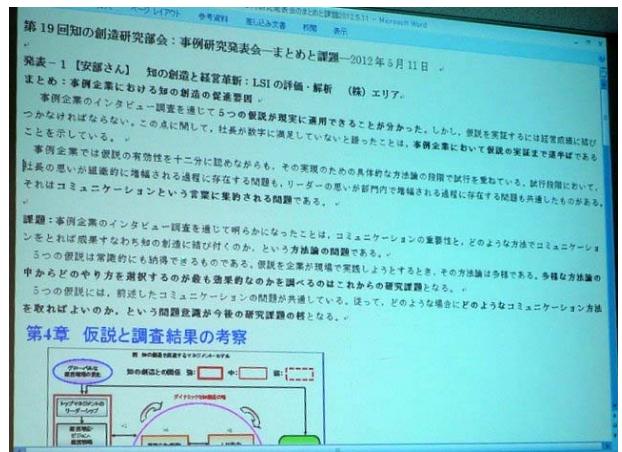


発表 3、SWQC から EGM へ NEC 通信システムの事例 荒木 聖史氏(写真左)

発表 4、HP 社における知識創造マネジメントと知の国際移転 瀬川 隆司氏(写真右)



発表 5、(株)富士通ラーニングメディアにおける KM(知の創造)活動 新藤 尚武氏(写真左)



植木先生のまとめと課題、全体の討議



懇親会の様子 (この写真の撮影・提供者は安倍博文さん、ご本人が写ってない)

◆安部博文さんの発表者コメント

電気通信大学産学官連携センター 安部 博文

まず、事例企業の発表の機会を与えて下さった当研究部会の植木英雄先生に御礼申し上げます。

以下、当日の発表で感じたことを述べます。

今回は植木先生が提示した5つの仮説とインタビュー用紙A・Bに基づいて、情報を収集し、分析した結果を報告しました。

その結果は、5つの仮説は妥当性がある、ということでした。

その上で、事例企業のインタビューで明らかになった問題として、社長の考えが組織的に増幅しにくい、ということでした。それをコミュニケーションの問題として報告しました。

その後の質疑応答や他の事例発表を聞きながら、次のことを感じました。

経営革新は付加価値の上昇を目標にする活動です。しかし、事例企業の場合は、潜在化しているコミュニケーションの弱さの問題が調査によって明らかになりました。もし、追い風の外部環境に助けられて事例企業の経営成績が良かった場合、その欠点が見えにくくなります。そこから考えると、意識的に新しい試みを取り入れながら、強みを鍛え、気づかなかつた弱点を見出し潰していくというマネジメントもありうる、と考えました。これは私にとって新しい気づきでした。

インタビューしたのは2年前です。本の発刊時期との時間差が気になっていました。しかし、植木真理子先生から、取材した時点での分析ということで条件をはっきりさせれば良いとご教示をうけ、気になっていたことが解消し、納得できました。この場をお借りして御礼申し上げます。

最後に、当時と現在では事例企業にとっての外部環境が激変しています。具体的には、事例企業にとっての最大の取引先であるテキサス・インスツルメンツ (TI) の撤退が決定しました。TIに限らず国内の半導体事業が苦戦しているなか、事例企業がこれからどのような経営戦略を進めていくのか、社長の舵取りの器量が問われています。どのような知識創造を行なっていくのか、引き続き注目していきたいと思います。

◆井上史子さんの初参加記

帝京大学高等教育開発センター准教授 井上 史子

ご挨拶

日本ナレッジ・マネジメント学会の皆様、初めまして。この度、知の創造研究部会に入会させていただきました、帝京大学高等教育開発センターの井上史子と申します。ナレッジ・マネジメントについては最近勉強を始めたばかりですが、学会および研究会に参加させていただくことでさらに理解を深めていければと考えております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

5月11日に開催されました知の創造研究部会の第19回研究会にも初めて参加させていただきましたが、準備された席では足りないほどの参加者がいらっしまったことに先ずは驚かされました。近年、学協会や研究会では人を集めるのに苦労するというような話も聞かれる中、20名を越える会員の皆様熱心に議論されていらっしやる姿には、心躍るものがありました。また、大学や企業における最先端のナレッジ・マネジメント研究のプロセスと成果を知ることができることも、本研究会の大きな魅力であるように思います。

私は、現在は高等教育開発（大学界でいうところのFD: Faculty Development）を専門としておりますが、「組織的FD」を進めるにあたり大学における「組織」をどのように捉えるのか、その際のマ

ネジメントモデルの構築が大きな課題となっております。皆様より多くの示唆をいただきながら研究を進める所存です。次回の研究会も楽しみにしております。

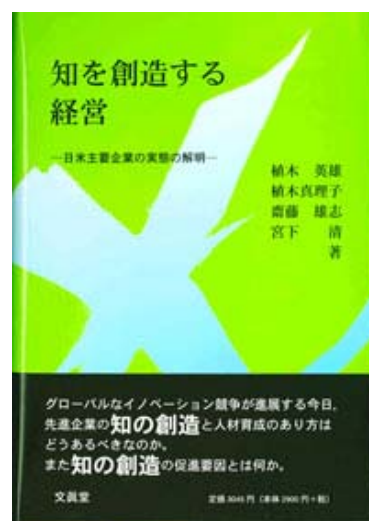
◆お役立ち情報 以下の本が会員価格で安く買えます

植木部会長より当日の部会で、会員の皆様へのお役立ち情報をいただきました。

植木英雄、植木真理子他著『知を創造する経営』（2011年、文眞堂）は、定価 3045 円（本体 2900 円＋税）のところ 本学会員である旨を文眞堂の前野浩太氏に連絡されれば本学会員は特価 2500 円（送料込）で入手できますので、本学会員であることを付記されるか、電話で伝えて下さい。

<http://www.bunshin-do.co.jp/catalogue/book4719.html>

尚、以下に高梨副理事長の推薦文を添付します。



★『知を創造する経営』を推薦

日本ナレッジ・マネジメント学会副理事長 高梨智弘

1998年に日本ナレッジ・マネジメント学会が創設されて以来、多くのナレッジ関係図書が出版されてきた。事実、ナレッジ・マネジメント導入企業の成功事例、多様な方法論、欧米の情報技術に焦点を当てた専門書の翻訳等、評価できる書が多数世に出た。

しかし、本書のように 1106 名のアンケート調査の回答と 171 名の管理者に対するインタビュー調査から得られたデータをベースにし、詳細な事例研究と分析を行ったケースは希である。本書の高度な考察結果は、現代企業経営にとって大変に貴重である。

本書によって、今後の経営改善・業務改善に資する多面な知の視点が明確になった。改善や改革は、どんな理論や手続きを掲げても、知識体系の枠内で振り回しては全く意味がない。顧客、社会から認められる良い経営を継続的に実行できる具体的な重要成功要因を取り込んだ実践力体系としてのナレッジ・マネジメントを理解して初めて改善・改革が可能となる。

本書は、日米における自動車及び情報機器の主要企業 28 社の実態を解明することで、その実践力のベースとなるデータを示してくれた。

また、経営の全領域における活動について、特に、「知の場」の活用が、リーダーシップ、経営理念、ビジョン、経営戦略、ブランド価値向上、顧客満足等を通して有効であることを証明した。ナレッジ・マネジメントの知の概念を、従来の情報共有等の仕組みや手続き志向から、人の意識や知恵に広げていることは、実践の場で価値がある。多様な人の組織である現代企業経営の改善・改革の実践力を、仮説検証・事例研究による定量・定性的な分析と「知のピラミッド」をベースにして「知の創造と場の概念」を明確にした「知の経営」（ナレッジ・マネジメント）独特の考察によって、正確に捉まえ実践的な結論に導いている。

本書は、企業経営の改善・改革に有効なきわめて価値の高い書である。

知の経営に関心を持つ読者は、本書の結論を自社の成熟度に合わせて咀嚼し「知識を基盤とした実践される経営行動は、その実践プロセスを通じて組織の知恵となり、組織の力となる」ことを、認識して欲しい。（以上は推薦パンフレットより抜粋 文責松本）